

沖

12
2018

俳句雑誌【おき】



栗名月

能村 研三

内子の大瀬

盆の月何も挿さざる壺ひとつ

長き土間抜け秋風の川に出る

高々と田仕舞の炎は許されよ

雨音に耳聴くをり菊枕

「機」を主宰する江崎紀和子さんから、25周年のお祝いの会で講演の依頼を受け、松山に行ってきた。四国には「沖」の支部がなく、俳句ゆかりのまちの松山には中々行く機会がなかったため、有難くご案内をいただくことにした。江崎さんの勧めもあつて松山から40km離れた内子町を訪ねた。ここは以前一人で旅したことがあり、その時は蝋燭作りで栄えた古い民家の町並みと芝居小屋の内子座を訪ねた。今回は以前探し当てることができなかつた、ノーベル賞作家の大江健三郎氏の生家のある内子町の大瀬という町へ、榑部天思さんの運転する車でご案内いただいた。

大瀬は内子町の中心部から東へ小田川に沿って約10kmのところにある集落で、大江健三郎の生家は名物の焼鯖を売っている魚屋の隣の家で、今でもお兄さんが住んでおられるそうだ。大江さんの知名度が上がったことから町並み整備が行われ、昔の栄えたころを偲ばせる風景作りが進められた。

小田川沿いのわずかな段丘上に開けた大瀬の町は、かつて小田村からの木材の搬出に筏流しが行なわれていたという。

鮭打棒粗末がゆゑのしたたかさ

栗名月こなから酒の自愛かな

根ざらしの崖に秋寂ぶ音を聴く

糊固きシエフの帽子や神の留守

潮枯れのかそけき桜落葉かな

娶らせて緒に就くくらし秋麗

美緒結婚

町の真ん中を走る高知に通じる国道は遍路道で、装束を着た外国人のお遍路さんが歩いてきた。

大瀬は江戸時代から大洲和紙の生産地で多くの紙漉業者がいて、紙漉ぎでの物資経済の発達があったため栄えたそう
で、町のシンボリックな存在である大瀬村役場は現在「大瀬の館」として保存している。またここから近くの柱森三島神社には、明治の初めに植えられたという高さ30m、幹回りが大人三人で囲めるほどの巨木が聳え立っていた。30mとはビルだと10階位の高さで全国で十位の巨木だそう。遠くから眺めてもきらきらと黄金色に輝く紅葉のゆりの木であった。この木は大江健三郎が時に見上げたり触れたりもしただろうし、原風景の一つであったことであろう。

能村 研三

森林太郎

新ばしり 森岡 正作

微動せぬゴリラと秋思分かち合ふ
ハシビロコウの貌おれの顔秋うらら
どちらをと聞かれて国の新ばしり
抱かれて家路につけり案山子翁
数珠玉の相打ち合ひて刈られけり
農業を継げとは言へぬ鱚雲
大寺に音ひとつなし鴟日和

昔、頭が固かった頃、今でもそう変わりはないが、文学部に入った以上、小説家か新聞記者にならなければなるまいと思っていた。姉が池袋に下宿していて一時一緒に住んでいたが、近くに雑司ヶ谷墓地があり、そこに夏目漱石の墓があった。あやかりたいという気持ちがあったのであろう。大学への行き帰りによく拝んだものである。しかし今、墓に文字がどう刻んであったか一向に思い出すことが出来ない。

登四郎先生に（森林太郎とのみあり露けしや〜という森鷗外の墓を詠んだ句があり、好きな作家のお墓の佇まいをしみじみと見つめる先生の姿が想像される。私も修学旅行の付き添いで行って見たことがあるが、業績や経歴などがないことを、先生は良しとしたのであろう。

能村登四郎の軌跡〔4〕

能村 研三

捕虫網買ひ父が先づ捕へらる

『定本合掌部落』昭30

私が六歳の時の句。登四郎はこの句について「内気で外で遊ぶことをあまりしない研三に捕虫網を買ってやったら、子供は蜻蛉や蝶よりも父親の頭にその白い網をかぶせた。」と自解している。この頃の私はひ弱で病院通いをする事が多かったそう。さらに登四郎はへ子にみやげなき秋の夜の肩ぐるまの句よりこちらの句の方が明るくて好きであるとも言っている。父からの「みやげ」「肩車」の思い出はほとんど記憶にないが、この句は幼い日の一場面として胸中にある。

白川村夕霧すでに湖底めく

『定本合掌部落』昭30

『咀嚼音』の後記を書いた翌日登四郎はかねてから念願であった旅に出た。その旅は個からの脱出を図るもので、自己を起点として社会的な広い視野に立ち、俳句において風土性、社会性を追求する旅であった。合掌集落がダム建設で沈むという新聞記事を見て、飛騨の白川村を訪ね、山峡がダム化することによって、日本の伝統の美とほこる民族の生活が無惨に崩壊していく姿を取材した。ここで詠まれた白川村は現在世界遺産となっている合掌集落群のある場所ではなく、御母衣ダムの底に沈んだ集落のことである。



暁紅に露の藁屋根合掌す

『定本合掌部落』 昭30

この句の初出は昭和三十年の「俳句」十月号の作品三十五句の中の一句で、この号には澤木欣一の「塩田」の三十五句も収載されている。これは当時「俳句」の編集長であった大野林火が若手俳人であった二人に夏休み期間中の宿題として大作発表の機会を与えたもので、折しも俳壇では社会性俳句の攻勢の最中であつたため「塩田」も「合掌部落」も社会性俳句の一収穫と見なされてしまった。一泊した翌朝、宿の人に聞いて訪ねた合掌集落は朝露に濡れて輝き、その光景に登四郎は戦懐に近い感動を覚えたという。

凧の子の恍惚の眼に明日なき瀉

『定本合掌部落』 昭30

飛騨白川郷を旅した同じ年の十二月、秋田県の八郎瀉を訪ねている。不漁が続く漁業から農業への再生の道を進むため干拓が行われた。湖を奪われていく漁民の気持は複雑なものがあつたが、そんな中子供達が無心で凧揚げに興じている姿があつた。この八郎瀉から男鹿半島にかけての旅の句を俳句総合誌、更には「馬酔木」に合わせて百十六句を発表。登四郎はこの一連の作品について叙法的な発想を抑え硬質な表現に変えてみたが結果的には散文性をむき出しにしたものであつたと述べている。

蒼茫集



交響樂團

上谷昌憲

秋昼寝

大畑善昭

殿に指揮者の現るる寒露かな
秋涼し影より黒きオーケストラ
* 秋思の弦秋意の管のセレナーデ
指揮棒のいよよ小刻み野分立つ
楽章の終のシンバル冷まじや
交響樂團秋雷を曳き去りにけり

国一つ壊さむばかり秋出水
ことしまた敬老の日を敬遠す
* 秋昼寝してさばさばと生きてをり
秋天や胸につかへる何もなく
寝て思ふ明日は湯婆出さうかと
竜の玉ころげ出づればみ空あり

ひといろの力

吉田陽代

記憶

渚上千津

塩害に生氣失ふ柿落葉
* つはぶきの黄のひといろの力かな
手を添へて膝組みかへぬ俄か寒
老斑の目立たぬ化粧身に入みて
残る音の虫や雨音より強し
大空やスタツカートの翳雲

* 曼殊沙華身を裂きたまひし師を思ふ
自分史に記憶の途切れ秋薔薇
ポケットつきシルクのパジャマ鳴聴く宿
痛む日も晴れれば和み金木犀
雁来紅の育て方書きし八一亡し
露月夜ドラマ二度見の慣ひとは

スカイツリー

栗原公子

月今宵スカイツリーは輪投げの棒
キリンもぐもぐ食みゐるは秋の雲
ふふみたる飴玉砕く厄日かな
虫しぐれ充電中の灯の小さし
* 秋蝶や心もとなき手書き地図
一睡の後の夜長のもの思ひ

逆さ文字

千田百里

竹春の一斉蜂起めく嵯峨野
秋興や百円分の遠眼鏡
流木の海峡渉る良夜かな
* 胡桃割るふとA Iの世を思ひ
秋意かな吸取紙の逆さ文字
ママさんの来し方を聞く夜長かな

天水桶

辻美奈子

きはやかに祝の朝の初紅葉
* 天水桶秋水硬く満たしけり
鬼子母神堂小鳥来て声ばかり
白は散り紅は遅れて萩の花
てのひらの山河に転ぶ式部の実
すこし屈みて赤い羽根挿しくれし

方位

宮内とし子

* 飛び火して遠流の島の曼珠沙華
城跡の櫓は方位鳥渡る
休止符の入ればかなし鉦叩
足場組む男に匂ふ金木犀
一張羅着せられ案山子コンクール
秋草に正面はなし裏もなし

潮鳴集



音 叉

菊地光子

系 図

藤代康明

* 禅寺の賢さうなる青みかん
芒原音叉のやうに穂の揺れて
リズム良き象の足踏み風は秋
なびくもの着て秋風とたはむれる
輪唱のやうな風湧く蕎麦の花

二十五時

森村江風

次ページを待てぬ指先秋燈下
寝静まる森に産声木の実落つ
* 二十五時秋思の穴に籠りたり
暁闇に声削ぎ尽くす残る虫
夜長の灯窓それぞれに物語

銀漢へ修験の二千四百段
* 左近碑の蕊の詩域や鳥渡る
この秋思象望郷のマンボ踏み
玄孫みて風太の系図天高し
ペンギンの眼に望郷の鱗雲

断捨離

富川明子

* こころ秘すなら鶏頭の襷のなか
冬瓜ののつべらぼうてふ存在感
釣瓶落し尾灯に測る車間距離
根上りの松の星霜野分雲
断捨離の文焚く秋のけむりかな

飛鷹選評



能村 研三

ホルン吹く色無き風を震はせて 中西 恒弘

ホルンの音色は牧歌的な雰囲気を感じさせる。アルプスの山々に響きわたる光景がまなうらに浮かぶ。吹奏楽の練習なのか、人里離れた河原で一人で練習を続ける少年か。色無き風は秋の風のことだが、このように表現すると風にどこか冷たさを感じて、ホルンの音色もののびのびと伝わってくるようだ。

どうぶつのかたちをさがす秋の雲 稗田 寿明

メルヘンチックに詠まれた句である。これも千葉動物公園での吟行で詠んだ句だろうか。天高しと言われるが、秋は他の季節よりも空気がきれいで乾燥しているせいだ、視界広く空が高く見える。ひつじ雲、いわし雲、うろこ雲など動物に因んだ雲の名があるのも秋の雲の特徴。正式の名前が無くても秋の雲を見ていると、様々な動物のかたちを想像させてくれる。

ふるさとの柿の火照りを持ち帰る 栗坪 和子

久しぶりに故郷に帰郷した。いつ見ても懐かしい風景である。特に家の庭の木には特別な思い出があったのだろう。栗坪さんは少女時代柿の木に登るようなお転婆ではなかっただろうが、子ども頃柿挽きをするのは楽しみだったのであろう。柿の朱色は晩秋の夕日に映えて火照っているかのようで、ふるさとの懐かしい思い出を胸に家路についた。(以下略)

鶏頭やいつも真中のデヴィ夫人 嶋本 博司

ちよつと意表をついた句で面白い。デヴィ夫人と言えば最近テレビのバラエティ番組にちよくちよく登場し、齒に衣着せぬ物言いと、浮世離れたキャラクターで人気を呼んでいる。元々は日本で生まれた人でインドネシアのスカルノ大統領の第三夫人であった人。鶏頭の花は鶏のとさかに似て燃え上がる炎のような変わった花姿で、決しておとなしい花とは言えない。そんな鶏頭の花をとりあわぜた句、しかも存在感のある真ん中にデヴィ夫人を置いたのが面白い。

獣声に大地の鼓動風は秋 西村 渾

先日の千葉例会で千葉動物公園に吟行した時の句である。千葉動物公園にはレッサーパンダやキリンや象、猿などの動物がいるがライオンなど猛獣類が時折獣声を張り上げている。狭い檻に飼育されているのではなく、自然の大地をイメージするような設えの中に飼われていて、その獣の声は動物園の外にまで響きわたる。

沖作品



能村研三選

案内は身ぶりの英語小鳥来る

東京 嶋本 博司

不忍池に雲ひとはげや秋澄めり
をとこには忍べぬことも唐辛子

* 多言語の動物のこゑ秋うらら
どうぶつのかたちをさがす秋の雲
緋のカンナ余熱を帯びてゐたりけり

千葉 稗田 寿明

無月かな柱の陰の占ひ師

* 空のいろ恋ひ焦がれをり唐辛子
葛あらし戸籍をたどる調べもの

* 鶏頭やいつも真中のデヴィ夫人
梨売の幟はためくニュータウン

千葉 西村 渾

* ふるさとの柿の火照りを持ち帰る
冷ややかや灯籠坂へ道一つ

千葉 栗坪 和子

曼珠沙華むかしこの道遠まはり
行く秋の山にけぢめの靴洗ふ

* 道産子の白馬へ秋日送る
白露踏むレッサーパンダのうしろ耳

水脈太く帰港の漁船初秋刀魚

* 花葛や防人の妻恋ふる歌
ケーナの音の翔る上野や秋日和

* 獣声に大地の鼓動風は秋

市川市 中西 恒弘

* 爽やかな文字放送は手話に添ひ
酔芙蓉音無き雨に紅を増し

* 擦れ違ふ声に覚えや秋の暮

* 伝はらぬ本意底紅揺れてゐる
よよと泣く女浄瑠璃葛の花

* ホルン吹く色無き風を震はせて
信濃路や紅を交へて蕎麦の花

* お手玉縫ふ妻に夜長の鼻めがね
葛の葉を天地返しに潮の風

千葉 下村たつゑ